集合

1. ツグミ

冬に日本に来る渡り鳥の代表といえるツグミですが、鳥取では大きな群れを見ることができません。シベリアなどで繁殖したツグミは、大部分が日本海の真ん中を渡って能登半島に来るといわれています。能登から山地を伝って全国に移動して越冬し、春にはそのまた逆コースで繁殖地に渡るそうです。陸伝いに渡るより一気に海を横断する方がタカやハヤブサに襲われる危険が少ないのでしょう。しかし、そのためには飛行に必要なエネルギーを蓄えておかなければなりません。

冬の間は田畑や河原などで数羽で採餌しています。雪が積もって採餌できないときは、垣根や庭のピラカンサスやクロガネモチの赤い実を食べていますが、渡りにはタンパク質や脂肪が必要なため動物質の餌に変えるようです。3月中旬になると徐々に集団が大きくなってきます。陸上競技場のフィールドで、三々五々地面をつついている光景を目にします。ミミズや虫を探していると思われます。ホップして移動しながら探索しています。人が近づくと「キャッキャッ」と鳴いて木に逃げ、また地面に降りて餌を探します。この群れが見られなくなると、本格的に春がやってきます。

日本にいる間は繁殖期でないためさえずらず、口をつぐんでいるという意味でツグミと呼ばれたいうことですが、4月初め、渡りの前にはさえずる個体もあるようです。一度だけ聞いたことがあります。中部や北日本の高原で聞くアカハラなど大型ツグミに共通の「キョロン」と聞こえる音節が入っていました。

2. キブシ

キブシの果実

谷の斜面など明るい場所に生える低木で、打吹山には多くありません。遊歩道のような切り払われた場所で見られます。そのような場所に直径1㎝前後ある果実の中の種子がどのようにして来たのでしょう。タヌキが果実を食べて運ぶという報告があります。あの渋い果実を、です。

五倍子(ふし)とはヌルデの葉にできる虫こぶ(ヌルデミミフシ №129参照)のことで、タンニンをとるために採取されました。お歯黒に用いられるため大量に必要でした。キブシの果実がタンニンを含み、同様に用いられたため、木五倍子(キブシ)としたと牧野植物図鑑の語源にあります。

雄花

雄花

雄花穂

キブシは、春早く葉が伸びる前に開花します。多くの春の花のように黄色です。花は前年枝の葉腋ごとに穂状に付き、根元から開花していきます。雌雄異株で、雄花は穂が長く花数が多いため雌株の花より目立ちます。雌花の雄しべは退化していますので、雄花から花粉が運ばれる必要があります。

早春の花は花粉の運搬を担う昆虫が多くありません。また、気温も低く、昆虫の活動も鈍っています。小さな花であってもたくさん集まることで目立つ存在になるのです。この時期に送粉者となる昆虫は、成虫で越冬しているアブ、ハエの仲間です。しかし、花に来ているところを見たことがありません。

(倉吉博物館専門委員 國本洸紀 2024)